

つるの恩返し

おんがえ

とっとりけん
(鳥取県)

*
とんとんむかし

むかし、あるところに、まずしいおじいさんとおばあさんが住んでいました。

ある冬の日のこと、おじいさんは、たきぎをかついで町へ売りに出かけました。雪があとからあとからふって来て、山も田んぼもまつしろでした。歩いていると、田んぼの中で、何か、ばたばた、ばたばたあばれていました。おじいさんは、何だろうと思つて近付いてみました。すると、一羽のつるがわなにかかつて、逃げようともがいていました。おじいさんは、

「ああよしよし。人に見つかったらえらい目にあう。今、ほどいてやるぞ」といつて、つるをわなから外してやりました。

つるは、空高くまい上がり、うれしそうに「かう、かう」と鳴きながら、おじいさんの頭の上を三べん回つてから、山のほうへ飛んで行きました。

それから、おじいさんは、町に行つて、
「たきぎはいらんかな。たきぎはいらんかな」と、売つて歩きました。

やがて家に帰つて来ると、おじいさんは、「寒い、寒い」といいながらいろりに当たつて、おばあさんに、

「きょうは、つるがわなにかかつていたから、放してやった」と話しました。おばあさんは、

「それはまあ、いいことをしましたねえ」といいました。

夕方、だれかがおもての戸をトントンとたたいて、

「ごめんください。ごめんください」といいました。おばあさんが、

「この大雪のふる中にだれだろう」といいながら戸を開けると、きれいな娘が、雪まみれで立っていました。おばあさんは、

「まあ、雪のふるのに、寒かろう。早く入りなさい」といつて、娘を中に入れてやりました。娘は、

「人をたずねて町まで行くところですが、雪はふるし、日も暮れてきたので、すみませんが、ひと晩泊めていただけませんか」といいました。おじいさんとおばあさんは、

「泊めてやるのはわけないが、うちはびんぼうで、ふとんもないし、食べる物もろくな物が
ない」といいました。娘は、

「それでもいいので、どうか泊めてください」とたのみました。そこで、おじいさんとお
ばあさんは、娘を泊めてやることにして、火に当たらせてやりました。

あくる朝、おじいさんとおばあさんが目を覚ますと、娘はとつくに起きていて、いろり
には火が起こしてあるし、そうじもしてあるし、朝ご飯もできていました。

その日も雪がふり続いて、戸を開けることもできないほど雪が積もっていました。娘は
もうひと晩泊めてもらい、家の仕事を何もかもしました。そうしているうちに、四、五日
がたちました。ある日、娘がいました。

「わたしには、父も母もおりません。一生懸命働きますから、この家の子にしてもらえま
せんか」

おじいさんとおばあさんは、喜んで、

「わしらは、子どもがなくてさびしかった。それなら、うちの子になっておくれ」といい
ました。

ある日のこと、娘がおじいさんに、

「機織りをしたから、町へ行って糸を買って来てくれませんか」とたのみました。おじ
いさんが糸を買って来ると、娘はおくの部屋に行き、機まわの周りをびょうぶで囲かこいました。
そして、

「これから布ぬのを織りますから、どんな事があっても、織っているところを見ないでくださ
いね」とたのみました。

「ああ、いいとも。どんな事があっても、見ないからな」

ふたりがいうと、娘はびょうぶのむこうに入って、機織りを始めました。

キイトン バタバタ

バタバタ キイトントン

娘は、昼ご飯も食べないで織り続け、夕方やっと出て来て休みましたが、つぎの日もま
た織り続けました。

三日目の夕方、娘は、びょうぶのむこうから出て来ると、おじいさんとおばあさんにで
きあがった布を見せました。ぴかぴかと白く光ったもようのある美しい布でした。娘は、

「これは綾錦あやにしきという物です。おじいさん、これを町へ持もって行って売うってください。そして、代かわりの糸を買かって来てください」といいました。

おじいさんは、町へ布を売りに行きました。

「綾錦はいらんかな。綾錦はいらんかな」といつて歩いてみると、お殿とのさまが通りかかって、

「綾錦とはめずらしい。見せてみる」といいました。それがたいへん美しいりっぱな布だったので、お殿さまは、たくさんの小判こばんで布を買いました。おじいさんはびっくりして、大喜びで新しい糸を買って帰りました。

つぎの日、娘は、またびょうぶの中に入って、

キイトン バタバタ

バタバタ キイトントン

と、布を織りました。三日たつと、前よりもっと美しい布ができました。おじいさんが町に持って行くと、お殿さまが前よりもっとたくさんの小判で布を買ってくれました。

つぎの日、娘は、また、

キイトン バタバタ

バタバタ キイトントン

と、機織りをしました。三日目、おばあさんが、おじいさんに、

「あの子はどうやって、あんなに美しい布を織るのでしょうか。織おっているところをちょっと見てみましょう」といいました。おじいさんは、

「だめだよ。どんなことがあっても見ないと約束やくそくしたじゃないか」といつて止めました。

けれども、おばあさんは、

「気付きづかれないように、ほんのちよつとだけ」といつて、びょうぶのすきまからそつと覗のぞいてみました。すると、中には娘はいなくて、一羽のつるが、羽ばたきしながら布を織おっていました。つるは、自分のわた毛をぬいては、糸のあいだにはさんで布を織おっていました。

夕方、娘はびょうぶのむこうから出て来ると、布をおじいさんの前に置おいていました。

「わたしは、いつぞや雪のふる日に、おじいさんに助たすけられたつるです。長いあいだお世話せわになりましたが、ほんとうのすがたを見られたので、もうここにいることはできません」

娘は、そういって、外に出て両手りょうてを広げたかと思うと、つるになって空にまい上がりました。それから、「かう、かう」と鳴きながら、家の上を三べん回って、山の方へ飛んで行ってしまいました。

おじいさんとおばあさんは、またふたりきりになってしまいました。けれども、つるの織ってくれた綾錦のおかげで、一生安楽あんらくに暮らしましたとき。

* とんとんむかし　これから昔話むかしはなしが始まるよという意味いみの決まり文句もんく。

* 機　糸を織ってぬのにする道具どうぐ。

* びようぶ　部屋の中に立てて、風をさえぎったり仕切りしきりをしたりする道具。

* 綾錦　いろいろの色の糸で織った美しい布。